Title	新聞記事からみる「神学者」ラインホールド・ニーバー
Author(s)	澤井, 治郎
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.57, 2014.3 : 13-36
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5093
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

新聞記事からみる「神学者」ラインホールド・ニーバー

澤井治郎

はじめに

ラインホールド・ニーバー（Reinhold Niebuhr, 1892–1971）は周知の通り、パウル・ティリッヒ（Paul Tillich, 1868–1965）などとともに二〇世紀のアメリカで活躍したプロテスタントの神学者である。その活動や影響力は多岐にわたり、「公共の神学者（public theologian）」などとも形容されてきた。[1] 本研究の基本的な問題意識は、そうしたアメリカ社会において大きな影響力を有したとされる神学者の活動を宗教の一つのあり方として取りあげて、アメリカにおける宗教と社会の関わりについて考察しようというものである。そのためには、まず、ニーバーが神学や宗教研究の世界においてのみならず、彼が活躍したアメリカにおいてどのように評価され位置づけられているかという点を明らかにする必要がある。したがって、本論文においては、その手がかりとして、様々な領域の情報が掲載される新聞記事を資料として、特に今回はニューヨーク・タイムズによって、死後ニーバーが現在にいたるまでどのように扱われてきたかを明らかにしたい。

1. ニューヨーク・タイムズについて

ニューヨーク・タイムズは、一八五一年の創刊で、一八九六年より「高級紙」路線で成功した。現在では、「ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポストがニュース報道にかけては最も強力な新聞であることには疑いの余地はない」[2]と評される新聞である（以下、ＮＹＴと表記）。また、「アメリカでもっとも権威ある新聞の一つ。『印刷に値するすべてのニュース（を伝える）』という第一面の題号横に掲げられた標語通り、その報道は量的にも質的にもアメリカを代表する」[3]とも言われ、実際、ここに引用した標語の通り、ニーバーについても管見の限り全米の日刊紙のなかで最も多くの、そして多彩な言及がなされている。彼の死後いかに扱われてきたか、その展開を調べるには、編集方針の異なる複数の新聞でニーバー死去から現在までの期間をつなぐよりは、一つの新聞によってその全期間をカバーできることが望ましい。ただ、「高級紙として同紙と双璧をなす『ワシントン・ポスト』と比べると、少しリベラルな傾向にあるといえるようだ」[4]との指摘もあることには留意しておく必要がある。

ＮＹＴが公表しているデータによれば、その読者は約四八八万人いる。その中央年齢は五二歳、世帯収入の中央値は九四、五七二ドル、大卒以上六〇％であり、これらはアメリカ全体のデータと比べるとどれも高い数値である。[5]また、読者の内、専門職あるいは管理職にあるのが四〇％、経営幹部あるいは最高経営者が一一％となっている。したがって、全米の平均的読者を有しているとはいえないが、年収、学歴の高さ、職業上の立場などからみるに、概して社会や政治の動向に対してより関心のある人々が、その読者層であるということはいえるだろう。[6]

2. 記事の件数と推移

資料の収集方法については、New York Times. comのアーカイブにおいて「Niebuhr」そして調査の過程で気づいたスペルミスと思われる「Neibuhr」を検索した。それぞれ検索にヒットした全件の記事について内容を確認し、ラインホールド・ニーバーが言及されているもののみをサンプルとした。ただし、この検索にはブログ記事も含まれてくるが、新聞の報道および出版物とは一線を画すると考え、本研究では調査の対象から外している。[7] その結果、ニーバーの死去した一九七一年六月一日から二〇一一年一二月までにNYTにおいてニーバーの名前が言及されるのは三六三件になる。これを資料に、以下ではニーバーが死後どのように記事中で扱われ、どのような立場、あるいは役割をあてがわれているのかを整理し、新聞における彼の位置づけを明らかにする。

ティリッヒについても調べているため、ニーバーに関する記事数の年代毎の推移をティリッヒのそれとともにグラフにすると、図1[8]のようになる。興味深いことは、二〇〇〇年代からは大きく異なってくるが、それまでは、ティリッヒとニーバーの記事数の増減の推移が概ね一致することである。記事の文脈上ニーバーと同様の立場として併記される人物もティリッヒが四五件と最も多いことから、彼らが一つのセットのように記事中で扱われることが多いことを示唆している。[9]

また、「ニーバー」という名前が、誰との関連で言及されているかという点でみれば、最も多いのがジミー・カーター（二三件）、次がバラク・オバマ（一七件）であり、この記事群の多さが、一九七七年前後と二〇〇七年前後の記事の多さに反映されている。後者は所謂「ニーバー・リバイバル」と言われる時期にあたる。

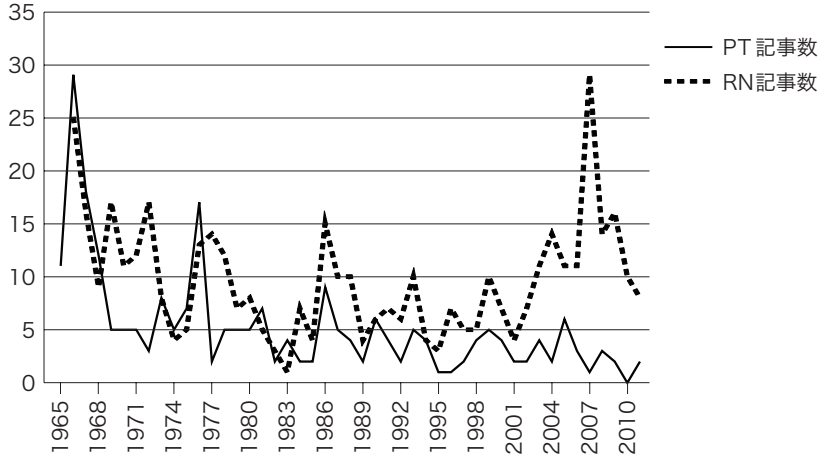

図1　NYTにおけるティリッヒとニーバーの記事数

3. ニーバーの肩書

まずニーバーがどのような肩書において紹介されているかを確認して、記事中における基本的な人物像を探る試みとしたい。

ニーバーが記事においていかなる肩書を与えられているかについて、死後の記事すべてを一括してまとめると（表1）のようになる。ただし、次の件数は、一記事に複数の肩書が与えられているケースもかなりあることから、その総和三九二件となり総記事数三六三を上回っている。

このように、約四割の記事で「神学者」として紹介されており、最も多い。またさらに四割近くの記事おいては肩書が書かれていない。そして、このどちらか以外の肩書で紹介されているのは二割強の記事においてのみであることが分かる。以下において、それぞれの肩書についてさらに詳しく分析してより具体的にどのような人物として紹介されているかを確認したい。

表1　肩書の別と割合

肩　　書	件数	総肩書中（392件）	総記事中（363件）
神学者	151	38.52%	41.60%
なし	141	35.97%	38.84%
哲学者・思想家	25	6.38%	6.89%
宗教的人物	20	5.10%	5.51%
その他	55	14.03%	15.15%

（割合の表記は，左側が肩書全392件を分母とした数値，右側は総記事全363件中当該の肩書が現れる割合を示す数値である。なお，小数第3位を四捨五入して表記している）

「神学者」（一五一件）

上述の通り、「神学者」という肩書が最も多い。これはかつてニーバー自身が神学者ではない［Niebuhr, 1956: 3］と言ったことから考えれば興味深いが、[10] 一般に彼は「神学者」と考えられていることを示している。

この「神学者」との肩書について、一五一件の内、九三件では何ら説明的な字句が付与されていない。単に「神学者のニーバー」と言えば、おおよその共通理解があることを前提とされているのかもしれない。その内容を理解するために、ここでは残りの五八件を取り上げて考察したい。

まず、「神学者」とする以上は宗教や教派の別が存在するはずであるが、実際にはそうした区別は二一件のみで、[11] 「神学者」という肩書全体でみれば、その約八五%においてこの区別はされていないことになる。これはキリスト教のプロテスタントであることがほぼ当然視されるか、そうした区別に重きを置かれていないかということを示す。その他の区分としては、国別の帰属を記すものは八件でこれも多くはないが、その内一件で「ドイツ系アメリカ」とされるものの、「アメリカの神学者」ということで一致している。

時代的な区別では、「二〇世紀の」あるいは「当時の」など、二〇世紀

の神学者とするものが八件あるのみでこれもそれほど多くない。この内二〇世紀の記事は半分の四件であり、それらではニーバーとの同時代性を表すが、二一世紀になってからの別の半分では過去の「神学者」であることを表す言葉となっている。

そうした基礎的あるいは形式的な区別と比べて目に付くのはニーバーの著名さを示唆する語句の多さである。それを整理したものが（表2）である。このデータが示す通り、「神学者」に何らかの説明語句を付与するものの四割以上でニーバーを「神学者」として高く評価する語句が付けられている。これは、上記の宗教や教派の別、あるいは国や時代の別を記すまでもなく、ニーバーが有名で知られているということを示す一方、その影響力や偉大さにとって宗教の別はそれほど重要な区分ではないということを表しているとも考えられる。ただし先に述べた二一世紀以降に「二〇世紀の」と付された四件すべてで「影響力」や「巨人」などとセットになっており、〝過去の偉大あるいは著名な神学者〟といった意味合いが含まれることも確かである。

表2　ニーバーを高評価する字句の別

名声の種類	件数	割合（58件中）
偉大、巨人など	14	24.14％
有名、著名	6	10.34％
影響力ある	4	6.90％

こうした一般的な傾向を踏まえた上で、どのような神学的性格が考えられているかについて確認したい。ニーバーの神学的性格を整理すると（表3）のようになる。

ニーバーの神学の性格が書かれているのは、「神学者」に何らかの説明をする記事五八件中の約四分の一にあたる。最も多いのは「新正統主義」というニーバーの神学思想史における位置づけを用いるものである。これは厳格な神学思想を連想させるものであり、その点で「知的、思慮深い」とするものと近い。一方で、「中道左派」や「現実主義」などは、社会的な問題への態度を示すもので、その影響の方面からみたものがカーターやM・L・キングとの関連につながっている。

表3　ニーバーの神学の性格

神学の性格	件数	割合（58件中）
新正統主義	4	6.90%
中道左派	3	5.17%
知的、思慮深い	3	5.17%
現実主義	1	1.72%
リベラル	1	1.72%
カーターお気に入り	2	3.45%
キングを導いた	1	1.72%

このように、ニーバーは「神学者」として、宗教や教派の別にはそれほど注意を向けることなく、偉大で影響力ある「神学者」として言及されており、その名声は神学思想の知的厳格さと、社会的な問題との格闘という両側面に当てはまるものとして理解されているということができる。

哲学者・思想家（二五件）

哲学者あるいは思想家という肩書は、全記事の約七％で現れるに過ぎないが、相対的にみれば三番目に多い。この項で最も多いのは、「偉大な」、あるいは「公共の」などの偉大さや著名さを強調しながら分野を限定しないものであり、これが一一件と約半数を占める。その次が「宗教思想家」と政治関連の哲学者・思想家とされるのが四件ずつある。その他「キリスト教」や「プロテスタント」の「思想家」、「社会哲学者」などといったものが続いている。特別に限定されずに思想家とされており、そのなかでも具体的には宗教と政治への関わりが挙げられるという点が特徴であろう。その影響の方面を表すものとして「オバマお気に入りの哲学者」というものがある。

宗教的人物（二〇件）

ここには特別な傾向は見受けられないが、「説教者」や「宗教的リーダー」など宗教に関係する主要な人物であることが述べられる。

その他（五五件）

当然「その他」には、様々な肩書が現れている。簡単に紹介すると、「ユニオン神学校の教授」など一時代を築いた名門神学校である同校との関連で述べられるもの（六件）、それと関連して「知識人」とするもの（七件）がある。また、他の項目におけるのと同様に、偉大で指導的な人物、あるいは公共的な人物であったとするものが一二件と目立っている。

さらに、リベラル（六件）や現実主義（七件）といったニーバーの社会に対する基本的な立場を示すものや、反共や反ナチなど具体的な政治的立場を示すもの（七件）が多いのも特徴である。

ここまでの肩書についてまとめておくと、「神学者」が最も多い。また単に「神学者」とされ、その性格に触れるものはあまり多くない。それに、「説教者」など宗教的人物を表すもの、「宗教思想家」などを含めると、肩書の約半数が宗教に関連する人物ということになる。そこで目立つのが「有名な」あるいは「巨人」など著名さを強調する語句が頻繁に付与されていることである。この傾向でみれば、肩書「なし」もあえて他の肩書を付与しない点を考慮すれば、有

名な神学者あるいはそれに類する宗教家あるいは宗教に関わる人物であり、かつ、ことさら説明する必要はないと理解されていると解釈することが可能であろう。そして、残りの少ない件数においてリベラルや現実主義など宗教的あるいは政治的立場が示されている。

4. 記事の内容と文脈

死去直後の死亡記事、追悼記事による評価

ニーバーは、一九七一年六月一日に脳梗塞の長い闘病生活の後死去した（享年七九歳）。NYTでは、それを受けて死亡記事、追悼記事、あるいは葬儀の案内など合わせて六つの記事が出された。その記事によって、この時点でのニーバーの評価を確認しておきたい。

ニーバー死去の翌日、第一面でその訃報が伝えられたが、そこで「彼は実業界で説教する神学者、日常的な道徳的苦境に彼の信念を適用させる倫理哲学者、非情なプラグマティズムを支持する政治的リベラルであった」（NYT, 1971/6/2）とその多面性が記されている。

その神学は、「新正統主義と呼ばれる。それはニーバー氏が傲慢と定義する原罪を強調するものであった」とし、それは「福音主義者ビリー・グラハムや『ポジティブ思考の力』の提唱者ノーマン・ヴィンセント・ピールの立場とは対立するものであった」と記されている（NYT, 1971/6/2）。

また政治との関連では、ニーバーは「リベラル・リアリズムの提唱者」とされ、多くの政治家に影響を与えジョージ・

ケナンがかつて「われわれ皆の父」と称えたこと、さらには一九四四年にはニューヨーク州の地域的な政党、ニューヨーク自由党（Liberal Party of New York）の創設に携わり、その副議長を二二年間務めたことが記されている（NYT, 1971/6/2）（NYT, 1971/6/3）。

この「リベラル・リアリズムの提唱者」という形容に関して、当時ニューヨーク州立大学で政治神学を担当していたMichael Novakは追悼記事において、ニーバーはキリスト教現実主義の設計者であり、「リベラル・リアリズムとは世界の不完全性に対する感覚において相違」していると述べている（NYT, 1971/6/6）。

以上のようにニーバーの死去直後の評価がまとめられる。ここで、確認できることは、ニーバーがアメリカにおける神学のなかにおいて、傑出した存在であるとともに、政治的な関連においても、当時の現実主義学派のあいだで、一定の影響力を有していたとされていることである。しかし、ニーバーをいわゆる政治的な「リベラル・リアリズムの提唱者」とする記事と、それとは区別して「キリスト教現実主義の設計者」とするものが存在することにも注意しておきたい。

一九七一―一九七四年

上記のような、死亡記事や追悼記事を含め、一九七一年や翌年まではニーバーに関する研究書の書評など比較的記事数が多く、主題がニーバー自身に関する記事がこの時期に集まっている。書評においては、「文脈や次元は変化していくが（中略）、人間の本性と運命（the nature and destiny of humans）は奇妙にも予示的で、奇妙にも反復的で、奇妙にも循環的である。ニーバーは原型（a prototype）である」（NYT, 1972/3/5）と、その不朽の業績を称えられている。ニーバー死去から翌年にかけて、業績を記念するという意味もあって出版や記事が集まっていると推測される。

またそれと関連して、ニーバーを記念して創設されたラインホールド・ニーバー・アワードの受賞者の論考や動向などの記事群がある。これはニーバーの精神を最も体現した人物に賞を贈るというもので、第一回の受賞者に Theodore M. Hesburgh という人種問題の専門家で公民権に関するアメリカの諮問委員会の委員長を務めていた人物が選ばれている。これはニーバーの業績が人種問題、特に公民権運動と密接に結びつけて理解されていたことを表すものである(NYT, 1972/9/22)[12]。

またある程度の数がある記事群に他の人物の死亡記事や追悼記事がある[13]。これらは故人の生前におけるニーバーとの交流が記され、故人を説明するものであり、故人の説明に、ニーバーの名前が出されていることについては、読者に対するニーバーの浸透度を前提していることや、ニーバーの名前が故人の生涯に彩りをもたらす存在と考えられていることが指摘できる。これは、著名人によるインタビューの記録をNYTとコロンビア大学が合同で出版するという記事(NYT, 1972/7/7) において、その主だった人物のなかにニーバーの名前が明記されていることからも窺える。

この時期の宗教が主題に含まれる記事群で目に付くのは、ニーバーの不在感である。主題自体は、カトリック信仰の近代性への順応(NYT, 1971/7/3)、「急進的な宗教運動」の台頭(NYT, 1971/7/4)、ベトナム戦争を受けた悲嘆と癒し(NYT, 1972/12/30)、ニクソン大統領によるホワイトハウスでの宗教的説教会(NYT, 1971/8/8) など多岐に渡っているが、そこで語られる問題は、アメリカが「精神的荒野をさまよう時代」あるいは「宗教的に不確かで流動的」な時代にあって、ニーバーのような確かな方向性を示す神学者がおらず、ビリー・グラハム率いる「宗教的急進派」が一人勝ちの状態になってしまっているということである。

政治関連の記事群では、国内政治と外交関連に大別できる。前者の文脈では、リベラルと保守の関係が近くなってきているというNYT記事に対して、ケネディやジョンソン政権で顧問を務めた政治学者 John P. Roche による、「ラインホールド・ニーバーにリベラルの源泉を引くわれわれにはあてはまらない」という反論が掲載され、ニーバーはリベ

ラリストの源泉だと論じられる（NYT, 1973/4/1）。それに対して、外交関連の記事においては、ニーバーの「力の均衡論」では不十分（NYT, 1972/7/21）、あるいは、ニーバーやキリスト教現実主義者が反対するような考え方である「建国以来の世界の模範」として、アメリカは世界を救うために戦わねばならぬと主張され（NYT, 1972/7/23）、外交の指針としてニーバーは不十分とする主張がなされている。

その他、ある教授解雇問題[14]に関連して、大学による解雇の決定を批判するＮＹＴ記事を批判する投書記事において、「人は善意をもって悪を為す」とのニーバーの言葉を引用して、この解雇が妥当とする（NYT, 1972/2/27）。これは、直接ニーバーとは関係のない問題について、ニーバーの言葉を格言的に判断の基準とするものである。さらには、ある書評において「ニーバー、ティリッヒ、バルトの主著ぐらい読みにくい本」とやや批判的に難解さを表すために用いられてもいる（NYT, 11/5）。

一九七五年―一九八〇年

まず宗教関連記事について、アメリカにおける新たな宗教的動向（「新たな敬虔主義」、カール・ラーナーの影響力、テレビ説教）のなかで、ニーバーは、バルト、ティリッヒとともにそれらの新たな動向に対して過去の主要な神学者という意味合いで用いられている。また、アメリカにおける宗教の現状を映画やミッキー・マウスによって分析する記事がある。ミッキー・マウスは、ニーバーの現実主義とは対照的に「責任のない神学」を体現してアメリカに現実主義蔑視をもたらしたと論じられ（NYT, 1977/12/3）、ハリウッド映画は優れた宗教映画を作れておらず、そもそもアメリカで成功した神学者ニーバーでさえ厳密に「宗教的問題」よりもソーシャル・ゴスペルの議論で名声を得たというアメリカの宗教的あり方が問題とされる（NYT, 1976/1/18）。宗教の現状に関する記事では、ニーバーの言及のされ方は、バ

ルト、ティリッヒ、ニーバーなどの神学的巨人の時代が過ぎ去り、現在は、神学における知的挑戦や議論がなく、神学的に不毛な時代が到来している、というものである。また「ニーバーの言う存在への勇気（the courage to be）」と、ティリッヒと混同されている記事もある（NYT, 1977/8/24）。

この時期、最も特徴的な記事群は、大統領候補（後に第三九代米国大統領）ジミー・カーター（James Earl “Jimmy” Carter, Jr.）との関係でニーバーの名前が頻繁に言及されたものである。

ＮＹＴにおいて、カーターとの関連の記事がはじめて出たのは一九七五年一二月四日のカーターを紹介する記事である。そこでは、カーターはボブ・ディランの歌、ディラン・トーマスの詩、ニーバーの書物をたしなむ内省的な人と紹介された。ここから、カーターの選挙動向を報じる記事のなかでニーバーの名前がしばしば登場するようになる。

それらの記事で、ニーバーの言及され方には、ほぼ定型化された二つの種類がある。一つは、カーターがニーバーの言葉「罪深い世界において正義を確立するのが政治家の悲しい責務だ」を引用したというものである。どの記事においてもカーターがニーバーを引用したものとしてこの言葉が紹介される。もう一つは、カーターが正義について多くをニーバーから学んだというものである。こうした二つのパターンがほぼすべての記事において共通しているが、これを引き合いに出す際、その記事によって様々な解釈がなされている。以下に列記する。

・カーターが「民族的純粋性」という言葉を発し、人種差別主義者ではないかという疑惑、批判が持ち上がったことと関連して、自身の政治思想を弁明するために用いたというもの（NYT, 1976/4/12）。

・カーターが自分の信仰をオープンに主張することによる宗教的熱狂主義者、あるいはファンダメンタリストではないかという疑惑に対して、それを否定するために用いたとするもの（NYT, 1976/5/2）。

・カーターはニーバーの影響を主張するが、その政治思想は全く合致しないというもの（NYT, 1976/6/5）。

・カーターの主張を受けて、もしニーバーのようであるなら、カーターは素晴らしい大統領になるだろうというもの

(NYT, 1977/7/3)。

・カーターがニーバーやボブ・ディランの影響について語ったのは、公への受けを意識して使われただけだというもの(NYT, 1980/9/21)。

以上のようにみると、ほとんどの記事が、当選を意識して語られたものだとの理解のもとで、記事が書かれているということが分かる。このように、カーターが実際に影響を受けたかどうかは別として、ニーバーへの言及が選挙においてポジティブな結果をもたらすものして語られている[15]。

このカーターとニーバーの関連の流れに乗る形で、この時期他の民主党の政治家についてもニーバーからの影響が記されるものが散見される(NYT, 1977/11/18, 1978/4/2, 1979/7/18)。

一九八一―一九八五年

この期間は、これまでの期間と比べて記事件数が少なく、かなり雑多な主題においてニーバーが言及されている。一九八四年大統領選挙に関連させた記事が三件あるが、カーターの時のように候補者がニーバーに影響を受けたとするような記事はなく、レーガンが再選を目指しているという記事において前任のカーターとの比較で言及されるほか(NYT, 1984/4/29)、公立学校における礼拝の制度化や中絶などの倫理的問題が選挙の争点になるなかで、かつてニーバーが説いた「愛や赦しによる救い」や、現実主義的な対応について学ぶべきだと主張されている(NYT, 1984/3/7)。

そのほか、レーガン政権の行政予算管理局長David Stockmanが学生時代ニーバーの思想を研究していたことを記すもの、各国で大使を務めた外交官Robert E. Whiteが中米政策に関してケネディを引用して語った「中米の革命を起こすのはロシアでもキューバでもニカラグアでもない。それは不正義、残虐性、飢えだ」との発言に、記者はニーバーの

声が聞こえるとし、それは希望であると述べる記事。また、ニーバーやティリッヒが保守的な思想に「深い罪や悪、人間の生の悲劇への関心」をもたらしたとする一方、それは現レーガン政権の楽観的な保守主義と明らかに異なるとする記事のように、共和党議員、レーガン政権や保守主義との関連でニーバーが言及されている。

宗教関連では、ナチスに殺された神学者としてボンヘッファーを回顧する記事で、ニーバーとも交流があったことが言及されている程度で（NYT, 1984/4/15）、その他、アルコール依存症の治療法についての記事で「ニーバーの祈り」が活用されていることなどが記される（NYT, 1982/12/9）。

一九八六―一九八八年

一九八五年の暮れにフォックスによるニーバーの伝記が出版され、その書評、書評に対する投書、新刊案内などが合わせて九件掲載され、またニーバーの一九二八年に出版された日記*Tamed Cynic*が再版されてニーバー関連の書物が紙面を賑わせている。

政治家との関連で、日米貿易摩擦問題でアメリカ側のキーパーソンと目されたJohn C. Danforth下院議員（共和党）がニーバー研究でプリンストン大の学位を取得していること（NYT, 1986/9/14）、インディアナポリス市長William H. Hudnut（共和党）のモットーはニーバーのユーモアに関する説教だと述べたというものなど（NYT, 1988/3/27）、カーターは民主党であったが、共和党の政治家にもニーバーが言及されている。

また、公民権運動あるいはM・L・キングとの関連で、キングがニーバーから人間活動の罪性と集団は利害に弱いことを学んだとするものや、学生時代ニーバーの影響を受けたとする記事がある（NYT, 1988/1/17, 1988/11/21）。

その他、前の時期にもあるようにアルコホーリクス・アノニマス（AA）において「ニーバーの祈り」が活用されて

いるという記事がある（NYT, 1981/2/21）。

一九八九―二〇〇〇年

概してこの時期にはニーバーに言及する記事が少ない。そのなか、まとまった記事群があるのは大統領選関連である。一九九三年には当時大統領夫人であったヒラリー・クリントンについて、「史上初の本気で社会改革に燃えているファーストレディ」であり、その政治思想は「中道左派の神学者」ニーバーやティリッヒに影響を受けたところがあるという紹介がされた（NYT, 1993/5/23）。二〇〇〇年のアル・ゴアの選挙関連では、ゴア候補がニーバーや他の哲学者・思想家にさりげなく言及する真に知的な人物であると紹介されている。

その他主なものは、第二次大戦、冷戦あるいは共産主義関連の記事群とニーバー生誕一〇〇周年関連である。第二次大戦関連では、フランクリン・ルーズベルト大統領（当時）が一九四一年一般教書演説において万人の普遍的な自由を守るために英国の軍事行動を支援すると述べ「四つの自由」を挙げたが、その戦争の意義を説明するためルーズベルトは、the Office of Facts and Figuresにパンフレットを作成するよう指示し、ニーバーがその一つである「宗教の自由」（Freedom of Religion）について執筆するよう依頼されたことが記されている（NYT, 1992/6/3）。冷戦あるいは共産主義関連では、イギリスのノンフィクション作家 George Orwell のノートに「共産主義の疑いある人物リスト」があり、そこにニーバーの名前も含まれているというもの（NYT, 1998/7/29）[16]。また、冷戦を総括する記事においては、トゥルーマン・ドクトリンや封じ込め政策を準備したのはポール・ニッツやジョージ・ケナンらリベラルな外交政策思想家で、共産主義の脅威に対抗する最も役立つ理解を展開したのがシュレジンガーやニーバーら「リベラルな知識人」であったとされている（NYT, 1999/11/28）。冷戦は一九九一年に終結したことになっているが、それから約一〇年後に

も、記事の主題に、冷戦や共産主義についての議論が出てくることから、アメリカにとってそれが大きな問題であり続けていたことが分かるし、ニーバーが第二次大戦や冷戦においてイデオローグのような立場にあったという理解とともに、共産主義シンパとする見方もあったことも分かる。

一九九二年は、ニーバー生誕一〇〇周年であり、それに寄せた盟友シュレジンガーの記事が掲載された。そこでは、六〇年代から八〇年代にはニーバーは消えかけていったが、九〇年代はニーバーのリバイバルの時代になると希望を持って書かれている（NYT, 1992/6/22）。シュレジンガーは一九九〇年の記事においても、ペルシャ湾危機やイラクのフセイン大統領らに対するアメリカ外交に憂慮を示し、ニーバーによる「人間の生が陥る悪の深さについての警告」を忘れてはならないと主張している（NYT, 1990/12/17）。

また、一九九〇年にキングは学生時代ニーバーの正義論を受容したとするもの、一九九九年にはJesse Jacksonが時間のある時にはティリッヒやニーバーの書物を読むという記事があり、公民権運動と結びついて理解されていることが分かる。さらに、書評欄に対して、著者も評者も神学的な無知がひどすぎると批判する投書記事が掲載されているが、そのタイトルが“Brush Up Your Niebuhr”とされるのは興味深い（NYT, 1993/7/25）。ニーバーが神学の代名詞として用いられている。

二〇〇一―二〇〇六年

二〇〇一年から、九・一一事件を受けるような形で、アメリカの戦争の意味を整理するような記事が出始め、記事数も急増している。

二〇〇一年の一一月には、アメリカの戦争とキリスト教の関係について、第二次大戦への参戦や大戦後のソ連との冷

戦やベトナム戦争の反戦運動などにニーバーは威力を発揮して、アメリカの戦争とキリスト教の関係の深さを指摘し、ニーバーからの引用として「衝突なしに平和は得られない」と述べてアフガン侵攻をキリスト教信仰から正当化しようとする主張がされる（NYT, 2001/11/10）。またその翌月には、ニーバーはG・ケナンやH・モーゲンソーといった冷戦構造の構想者とともに「歴史的現実主義」として取りあげられ、戦争状態は不可避だが民主主義や貧困の解消などによって国際的な武力行為は回避できるという立場であったと述べられている（NYT, 2001/12/16）。これらは、ニーバーの立場が「国際的な武力行為」のような歯止めの効かない状態にはならぬ範囲で、「衝突」や「戦争」が不可避だとするものだが、対照的に、翌年一月にはアフガン戦争関連で、「ブッシュの前任者ならショーペンハウアーやニーバーを引用していつまでも人間の悪の議論を楽しんでいるところだろう」との皮肉が記されている（NYT, 2002/1/23）。これは、ニーバーの思想は現実の問題に対処できないという含意があるが、いずれにせよ、戦争に対する立場を模索する記事のなかで、ニーバーの思想がクローズアップされている。しかし、それが示唆する帰結は上記の通り、一定ではなかった。

二〇〇三年以後になると、ニーバーの言及のされ方が定まってくる。二〇〇三年には、九・一一以後の他国を牽引し世界に自由をもたらすというアメリカの自国意識について、ニーバーの言葉として「やっきになって認めようとしないが、実際には行使している帝国主義」と述べて、アメリカの帝国主義批判の文脈で用いるもの（NYT, 2003/1/5）、あるいは九・一一以後アメリカのイノセンス神話が復活しており、それはニーバーが特に批判的であったもので、ニーバーの復活を期待する記事が出され（NYT, 2005/9/18）、二〇〇六年にはブッシュの善悪二元論的な見方を「無能な外交政策」とし、ニーバーの思想が現実主義として対比的に提示され、民主党がとるべき外交政策のモデルとして四〇、五〇年代のニーバーやケナンが引き合いに出されるなど、総じてブッシュ政権への批判とニーバーの高い評価とが合わさって言及されるようになる。こうしたニーバーへの注目の高まりとともに、共和党、民主党ともに政治家の動向や選挙戦

との関連で言及されるものも再び散見されるようになる。

このように特に外交などの政治的文脈でニーバーの必要性が主張される記事が増えてきているが、アメリカの宗教的状況に関する記事においては、ファンダメンタリストの主張が目立っていて、ニーバーのような進歩的なキリスト教思想家がいないこと、「教育水準の高くない福音主義指導者に取って代わられている」ことが述べられている（NYT, 2005/9/18）。

二〇〇七年―二〇一一年

この時期がニーバーの関連記事数が最も多い。二〇〇七年は大統領選挙の前年で、次の大統領にニーバー的な現実主義を有する人物が望ましいとする記事（NYT, 2007/3/25）やバラク・オバマ大統領候補（当時）によるニーバーは「お気に入りの哲学者だ」という発言などが目立つ。また、オバマだけでなく共和党の主要な候補であったジョーン・マケインがニーバーの「冷徹な現実主義は兵士や大衆を勇気づけるのには不十分」と語ったことや（NYT, 2007/9/9）、ミット・ロムニーの語る神にはニーバーによるような「欲求の制約、罪深さを課すような神」を表すものがないとするものなど（NYT, 2007/12/7）、ニーバーを基準に彼ら候補の思想や信仰を位置づけようとするものが現れている。しかしやはり多いのはオバマ関連で、オバマを高評価する材料として「ニーバーを引用する高潔な人」とされる一方（NYT, 2008/6/20）、オバマの現実から離れた言動には「ニーバーにとって胃痛の種」と表現されるなど（NYT, 2008/7/25）、オバマがニーバーに影響を受けているというよりも、むしろ、記事上でニーバーを基準にしてオバマの言動を評価しようとする記者の姿勢が見て取れる。そもそも、一連のオバマとニーバーを関連づけて記事にする発端となった、ニーバーを「お気に入りの哲学者」としたオバマの発言も、ＮＹＴの記者からの「ニーバーについてどう思うか？」との

問いに応じたものであった（NYT, 2007/4/26）。

しかし、それだけではなく二〇〇七年に突出して記事数が多いのはニーバーをモデルにした演劇Horizonの論評とそのイベントリストが六件あることにもよる。その論評で、ニーバーによるキリスト教の政治への適用は、近年ネオコンとリベラル（オバマ含）両方から適当とされているとされ（NYT, 2007/6/6）、ニーバー思想の社会復帰に期待するものなど（NYT, 2007/11/18）、九・一一事件以後の流れのなかで総じてニーバーへの注目度が高まっている。

それだけでなくM・L・キングの信仰がニーバーの伝統を引いているというもの（NYT, 2007/12/9）、当時大リーグNYメッツの監督だったジェリー・マニュエルが自身に影響与えた思想として、キング、ガンジーとともにニーバーを挙げているもの（NY, 2008/6/18）、キングは白人を前に話すときはティリッヒやニーバーを頻繁に話題にした（NYT, 2008/4/27, 2009/1/18）、あるいは、キング生誕八〇周年が黒人初のオバマ大統領就任式の前日に祝われたというもの（NYT, 2009/1/18）などキングあるいは人種問題の関連でも頻繁に言及される。またオバマのノーベル平和賞受賞スピーチについて、オバマがケネディとキングを引用したことに対して記者がむしろその内容にはニーバーを感じたとするもの（NYT, 2009/12/12）など、黒人初の大統領オバマとキングを結びつける記事も多く、キングやオバマの説明においてニーバーからの影響を指摘するものも少なくない。

おわりに

以上みてきたように、ニーバーは基本的に「神学者」あるいは宗教に関わる人物として扱われ、また、細かな神学の性質よりも著名な人物として理解されている。しかし、言及される記事のコンテキストは、宗教関連のニュースだけで

なく、主なものとしては大統領選挙関連、外交関連、公民権運動あるいは黒人問題に関する記事においてよく言及されてきている。

宗教関連とは、神学思想の動向や宗教状況に関するものを指しているが、それに関する記事でニーバーが多く言及されたのは一九七〇年代までである。一九六〇年代中頃から一九七〇年代初期までティリッヒとニーバーの神学思想がまるでブームのように頻繁に取りあげられた。しかし、一九七〇年代後半にかけては、逆に彼らの不在感がしばしば述べられ、それ以後はこのコンテキストにおいて言及されることはかなり稀になっている。しかし、その稀ななかでも、「ニーバー」の名前がまるで神学の代名詞のように用いられるなど、一時の流行からは落ち着き、神学あるいは宗教に関する古典的な存在として扱われているようである。

黒人問題に関しては、一九七二年ラインホールド・ニーバー・アワードが人種問題の専門家であり当時公民権（Civil rights）に関するアメリカの諮問委員会の委員長であったHesburghに贈られ、その後もしばしばキングや他の公民権運動に関わる人物への思想的影響が指摘されてきて、今日まで続いている。これは、ニーバーの思想あるいは活動が公民権運動を支持し、黒人差別に対して批判的なものである、とされてきたことを意味している。

外交関連では、死後直後の頃には冷戦構造の形成に携わった現実主義者の一人として論じられ、その後も度々言及されてきたがそれほど多くはなかった。それが二〇〇一年からこの関連での言及が急激に増えている。二〇〇一年以後ジョージ・W・ブッシュ政権の外交政策が失敗であると認識されるとともに、冷戦の際のような我慢強い姿勢とアメリカの自己批判が必要だとして、ニーバー的思考の必要性が説かれる。

大統領選挙の関連では、カーターとオバマ関連の記事群に顕著だが、アル・ゴア、ヒラリー・クリントンなどの関連でも言及されている。[17] しかし、カーターとオバマの場合ではかなり状況が異なっていた。カーターは自らニーバーに影響を受けたと述べ、それは正義の理解に関して、および自身の信仰についてであった。また、単にニーバーに影響を受

けたというだけでなく、記事おいては選挙戦の行方に影響をもたらす人物として論じられる。しかし、オバマの場合には、オバマが言及する前からニーバーへの関心が高まっており、記者の側からニーバーを基準にオバマの言動を評価しようとする姿勢もみられる。

記事数の上からは、二〇〇七年頃にピークを迎えている。それまで上記のように主に四つの問題に関連してそれぞれに言及されてきた。それが、オバマの登場によって宗教関連を除く三つが一つの流れへと収斂していっている。ニーバー・リバイバルとはこうした流れにおいて起こったと理解できるだろう。

アメリカの国家の方向性を左右するような戦争を含む対外政策の意味づけ、それと対となる自国理解の傲りに対する戒め、大統領という国家を象徴する人物の決定に関して、政治的問題の専門家としてではなく、あるべき方向を示す「神学者」としてニーバーが言及されている。このように、これまでみてきたＮＹＴの記事においては、当然その全てにおいてではないが、あくまでも「神学者」として、社会的、政治的問題を評価する際の一つの基準のような役割を「ニーバー」という名前が担っているということが分かる。

注

（1）Marty, Martin E., 1974, “Reinhold Niebuhr: Public Theology and the American Experience,” *The Journal of Religion*, 54 (4).

（2）藤田博司『アメリカのジャーナリズム』岩波新書、一九九一年、七四頁。

（3）亀井俊介編『アメリカ文化事典』研究社、一九九九年、三二八頁。

（4）亀井『アメリカ文化事典』、三二九頁。

（5）NYT media kit, http://nytmediakit.com/newspaper（2013/08/24）

（6）ちなみに、二〇一〇年アメリカの中央年齢は三六・九歳（総務省統計局編集・刊行『世界の統計二〇一三』）、二〇一二年アメリカの世帯収入の中央値は五一、〇一七ドル（NYT, 2013/9/17の記事、http://www.nytimes.com/2013/09/18/us/median-income-and-poverty-rate-hold-steady-census-bureau-finds.html?pagewanted=all&_r=0）、アメリカにおける二五歳以上の成人の内、学士の学位を有しているのは三〇・四％とされている（NYT, 2012/2/23の記事、http://www.nytimes.com/2012/02/24/education/census-finds-bachelors-degrees-at-record-level.html）。

（7）なお、本研究で対象とする資料記事には、日曜版の雑誌*New York Times Magazine*、土曜日の*New York Times Book Review*を含んでいる。

（8）以下図表等においてティリッヒとニーバーを表す際には、それぞれイニシャルをとってPT、RNという略語を用いる。

（9）その他多い順に上げると、Karl Barth（一九件）、George Kennan（一二件）、Arthur M. Schlesinger Jr.（九件）、Hans Morgenthau（九件）、M. L. King（八件）と続いている。

（10）Niebuhr, Reinhold, “Intellectual Autobiography,” in Kegley, Charles W. and Bretall, Robert W. (ed.), *Reinhold Niebuhr: his religious, social, and political thought*, New York: Macmillan, 1956, p. 3.

（11）何らかの説明字句のある「神学者」との肩書五八件中、キリスト教：六件、プロテスタント：一五件。

（12）当初、一年毎に最もニーバーの精神を体現した人やグループに贈るものとして構想されたが、第一回の受賞者があったのみで次年度からは続かなかった。

（13）小説家・哲学者・平和主義者Henry Fitz Gerald、ユダヤ教のラビAbraham Joshua Heschel、ジャーナリストWalter Lippmannや詩人W. H. Audenの追悼ミサに関する記事がある。

（14）一九七二年、当時スタンフォード大学英語学准教授であったH. Bruce Franklinが、反戦、アメリカのラオス侵攻反対を掲げて、学生を率いて学内でストライキを行い、警察とも衝突した。それを受けてスタンフォード大学は、彼を解雇したという事件。

（15）ちなみに、米国国会図書館には、彼の未亡人アースラ宛てのカーターの書簡が保管されており、長くニーバーの思想に関

心があり、ニーバーに直接会ってみたいと思っていたこと、アースラから送られたニーバーの説教テープへの礼などが記されている。文面からアースラとカーターが何度か直接面会していたことも窺われる。書簡の日付は一九七六年八月一日、一九七九年五月三〇日、一九七九年七月二六日（Library of Congress, Manuscript Division, “Reinhold Niebuhr Papers,” Box. 46, F（Corr. J Carter 1976−79））。

（16）ただし、「私はあの有名なニーバーが共産主義のシンパだとは思わない」と付記されている。

（17）彼らは皆民主党である。ニーバーも民主党員になっていたことからその関係が大きいであろう。ただ、ＮＹＴが伝統的に民主党支持の立場であることもあり、他の新聞等においても同様かどうかはなお確認の必要があろう。